青森2026国スポ

西内 五輪選考に弾み

隙ない展開で圧倒

国民スポーツ大会「青の煌めきあおもり国スポ」が12、13日、青森県八戸市のフラット八戸などで行われ、レスリングの成年男子フリースタイル65㌔級で西内悠人（日体大＝高知南高出）が3連覇を達成した。県勢では同競技で初の快挙。少年男子フリースタイル60㌔級で藤原尚大（岡豊高）が3位に入った。女子62㌔級の徳原姫花（自衛隊体育学校＝高知東高出）は準々決勝でパリ五輪金メダルの元木咲良に敗れて5位。成年男子フリースタイル57㌔級の高杉大輝（香南市役所）と同74㌔級の下田瑛太（日体大＝国際高出）も5位だった。

（1面参照）

弓道では、成年男子が近的で準優勝した。予選を4位で通過。決勝トーナメント1回戦で地元青森を10―9で撃破すると、続く準決勝も10―9で東京を破った。決勝は大分に9―10で敗れた。

銃剣道は成年が2、3回戦で勝ち、準々決勝で福岡に敗戦。順位決定戦に回り、8位で終えた。

そのほか、卓球の少年男子は3回戦で地元青森を3―1で下し、準々決勝へ進出。バレーボールの少年女子は2回戦で大阪に1―2で惜敗した。軟式野球の成年男子は2回戦で茨城に延長戦の末に5―6で敗れ、いずれも8強進出を逃した。フェンシングの成年男子エペは2回戦で姿を消し、ボウリングの少年男子チームも予選敗退だった。

ーースタイル
kg級
高知県
西内 悠人
8
3

【成年男子フリースタイル65㌔級 決勝】第1ピリオド、相手のタックルをかわし、カウンターで点差を広げる西内悠人＝右（写真はいずれも青森県八戸市のフラット八戸＝13日、[illegible]撮影）

西内にとって、2026年は大学生活の集大成になる…はずだった。

カウンターも多かった高校までのスタイルが通じず、強豪日体大では自ら攻めるレスリングを少しずつ磨いてきた。今年の春休みには米国の大学で修業し、4年生となってようやく「しっくりくる」感覚をつかんだ。

ところが、その成果をぶつける今年5月の全日本選抜選手権の直前に、蜂窩織炎で1週間の緊急入院。大会は欠場となった。筋力が落ち、しっくりきた感覚は消え、気持ちは「落ちるところまで落ちた」。総合主将として臨んだ翌月の大学対抗戦も優勝を逃した。

集大成どころか何もかもうまくいかず、すがるように神社へ厄よけに行った。「今沈んでいるのは五輪選考に向けて跳ね上がるため」。そう自分に言い聞かせた。だからこそ今回の国スポは「負けるわけにはいかない。内容よりも勝ちにこだわる」と今まで以上に執念を燃やした。

素早いタックルを見せたかと思えば、泥くさく場外に押し出してもポイントを取る。タックルに入られてもカウンターで得点につなげる。初戦こそ一時リードを許す展開だったが、「内容は大会が終わってから振り返ればいい」と意に介さず。準々決勝以降は無失点かつ10点差で3分以内に試合を終わらせ、全く隙のない展開で圧倒した。

勝って当たり前の重圧をはねのけ、県勢初の3連覇達成に「1、2回目の優勝に比べたら今回はもっと圧倒できた。その成長をすごく感じた」。最大の目標とする2年後のロサンゼルス五輪に向けて、大きな弾みとなった。

その五輪の代表選考が始まる全日本選手権まであと2カ月。同じ階級には同郷の先輩であり、前回金メダルの清岡幸大郎が立ちはだかる。「今回の優勝で流れは良くなってきた。残り2カ月で仕上げる」。神に頼らずとも、勝利が何よりの厄払いとなった西内。集大成はここから始まる。

（東京支社・山崎達也）